# アイスホッケーにおける技の体系に関する研究

阿部　滉平（上越教育大学大学院）

## １．目的

本研究では，アイスホッケーにおけるスケーティングの技ならびにハンドリングの技を理論的に検討し，技の体系を構築することを目的とした。

## ２．研究の手順

本研究は，次に示す手順で進められた。

①アイスホッケーのスケーティングの技及びハンドリングの技に関する文献や先行研究を整理する。
②文献や先行研究の内容，筆者の運動経験を参考に，アイスホッケーの技の体系を仮説的に作成する。
③仮説的体系に位置づけたアイスホッケーの技が競技場面で出現するかを試合映像から確認する。
④試合映像から“確認できた”又は“確認できなかった”技を考察し，体系への位置づけを検討する。
⑤これまでの検討を基に，アイスホッケーの技の体系を構築する。

## ３．体系化の観点

金子(1974)は，体操競技の技の体系化を行う上で，個々の技の成り立ちから考察した。技の構造を明確にする一般的な拠点について，第一の拠点として“運動形態的構成要素”，第二の拠点として“運動技術的構成要素”といった 2 つの拠点を挙げている。“運動形態的構成要素”はさらに，“体勢変化要因”と“姿勢変化要因”の 2 つの要因があり，さらに，“体勢変化要因”は“運動面”と“運動方向”の観点で，“姿勢変化要因”は“器械に対する身体の向き”，“器械に対する身体の面”，“握り方”，“運動の空時規定”の観点で技を分類している。本研究では，これらの考え方を参考に，“運動方向”や“目標地点または目標物に対する身体の向き”などの観点から，5 つの階層に分け，技を体系化することとした。

## ４．アイスホッケーの技の仮説的体系

アイスホッケーのスケーティングの技及びハンドリングの技の体系を仮説的に作成した。その際には，前述した体系化の観点，文献に記載されている内容，筆者の運動経験を参考に各系譜へと分類した。各技の名称は先行研究や文献に示されているものを参考に，それらに示されていないものは，体系の周辺の文脈から筆者が名付けた。また，アイスホッケーの技に関する記述があった文献の記述内容も参考にした。

## ５．対象とする試合映像

平成 30 年 12 月 15～16 日に行われた第 86 回全日本アイスホッケー選手権大会の準決勝戦の 2 試合と決勝戦の 1 試合を対象として，スケーティング，ハンドリングにおける技の出現を確認した。試合映像からは技の出現率を見るのではなく，技の出現の有無を確認した。なお，公共放送の試合映像を使用しているため，画面から外れてしまった選手の動きは確認の対象外とした。

## ６．結果と考察

仮説的体系に位置づけたスケーティングの技，全 18 種のうち 15 種の技について，また，ハンドリングの技，全 19 種の技について出現が確認できた。このように，スケーティングの技には，競技場面で出現が“確認できた”技と“確認できなかった”技があった。出現が“確認できた”技に関しては，アイスホッケーのゲームに必要な技であるということが言える。技の体系に位置づけるために，運動構造を明確にし，考察した。出現が“確認できなかった”技に関しては，体系に位置づけられるものか否かを再検討した。

出現が“確認できなかった”技の中には，スケーティングの技の基礎として，初級段階の学習者に必要だと考えられるものがあった。この 1 技は，体系に位置づけられると判断された。

その他の 2 技について，一つの技は運動の合目的性の原理の観点から，競技場面においてプレイヤーがその技を選択する可能性が極めて低いもの，もう一つの技は仮説的体系に位置づけた段階では，停止動作の初級段階の技として位置づけられると考えていたが，学習者に対しての練習課題として行われており，技としては位置づけられない，と判断された。これらは，技の体系から外された。

## ７．まとめ

以上の検討を踏まえて，アイスホッケーにおけるスケーティングおよびハンドリングの技について体系化し，技の位置づけを整理することができた。

## ８．主な参考文献

１）Ron Davidson, PLAY BETTER HOCKEY, A FIREFLY BOOK, 2010.